魔法学院物語(仮)

霊琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法学院物語（仮）

【Ｎコード】
Ｎ１４３８ＢＡ

【作者名】
霊琉

【あらすじ】
クロリア王国首都クロリア。そこには世界最大の魔法学院マジックゲートがある。生徒達はよりランクが高い魔術師になろうと日々励んでいる。
これから始まるのは様々な者達がめぐり逢い、織り成す物語。

＊魔法学院生徒物語改訂版

プロローグ

――ドクン……ドクン。

光など微塵も入り込まない真っ暗闇。心臓の音が響くだけ。
何時間、何日……いや、何年間も経っているかもしれない。
視るという行動はとうの昔に忘れた。聴覚は働いてはいるが心臓の音しか聞こえない。
嗅覚を働かせても腐ったような臭いしかしない。声をだそうとしても口が何かに塞がれてくぐもったうなり声しかあげられない。

ナゼ、オレハココニイル？

イマイマシイニンゲンドモメ……カッテニウミダシ、テニオエナクナルトスグニトジコメヤガッタ。

タシカニ、オレハバケモノ。ダガ、マエハニンゲンダッタ。イミノワカラナイジッケンデ、ニンゲンデハナクナッテシマッタ。
アレカラ、ドレダケタッタ？

マダ、ジッケンハオコナワレテイルノカ？

シリタイコトハヤマホドアル。

――カツッ……。

何処からか床に何かが当たる音が聞こえる。

――カツッ、カツッ。

少しずつ音が近づいてくる。……これは足音だ。
ひさしぶりに聞く、自分以外がたてる音。
その音は突如として聞こえなくなる。
――キィィ……。
何かが床とこすりつけられる音とともに、真っ暗闇の景色が真っ白に染められた。
目を刺すような痛みにたまらず目をつむる。……視覚は働いた。黒以外の色を見た。
……マブシイ。
口に手が添えられ、次の瞬間口を塞いでいたモノが外される。
「ウゥッ……ダ、レ、ダ……」
ひさしぶりに声をだした。長い間話さなかったことで、あまり良い声とは言えない。目も徐々に光になれ、景色が映し出される。
「私は君を助けに来た。……君を苦しめたヤツらに天罰を与えよう」
目に映ったのは光を背に、語りかけてくる少年。差し伸べられている手と少年を交互にみる。
テンバツ？　バカラシイ。ダガ、オレヲタスケテクレタコトニハカンシャシナイトナ。
「……キューセイシュ、カ？」

少年は腕を引っ込め、考えるように手を顎にあてる。

「救世主？　……悪くはない。そうだな……それがいい」

少年は納得するように何度も頷いた。再び手を差し伸べ言った。

「私はメシア……救世主だ。私とともに世界を変えよう」

……ナンダ、タダノカミサマキドリノニンゲンジャナイカ。

ダガ、コイツトイルトタイクツシナクテスムカモシレナイ。

……スコシバカリ、オロカナニンゲンノタワゴトヲキイテヤロウ。

簡略設定

この世界には魔法が存在する。魔法を使うには魔力が必要だ。魔力は生まれつき持つものでほとんどの人が持っている。

魔力には属性があり、使用者の属性に合った魔法の威力が高くなる。

強い魔法であればあるほどより多くの魔力を消費する。

魔法は様々な種類があるが大きく分けて４つの種類がある。

『白魔術』……防御や治療など主に使用者を補助する魔法が多い。

『黒魔術』……相手を攻撃する魔法のほとんどがコレに分類される。そのなかには使用者の生命を削る危険なモノも存在する。

『錬金術』……物質を別の物質に変えたり、物質を作り出す魔法というより技術。

『召喚術』……遠く離れた魔力を持つ生物を呼び出す魔法がコレにあたる。熟練した者は異世界の生物を呼び出せるという。

他にも様々な魔法が存在し、違う種類の魔法を組み合わせ、新たな魔法を作ることも出来る。

この世界では魔法学院と呼ばれる学校があり、初等部（６年間）、中等部（３年間）、高等部（３年間）、上等部（４年間）に分けられる。

魔法学院は全寮制の場合が多く、基本的に２人部屋しかない。

魔法学院の敷地内には校舎に加え、食堂や図書館、寮がある。

食堂は1階が初等部、2階が中等部用、3階が高等部、4階が上等部用とわかれている。

図書館は3階建てで1階は普通の本、2階は魔法に関する本、3階は王国や世界の歴史を記した本や資料などがある。

魔法学院の生徒には成績に応じてランクが決められる。

AからFの基本ランクに加え、優秀な者……いわゆるエリートランクのS、落ちこぼれのGがある。

ランク分け試験は年に3回、長期休業前に行われる。

ランクは学院内だけではなく世界中で共通している。やはりランクが高いほど社会的地位も上がる。　ランクは魔力の大きさと魔法の技術、知識、体力などにより決められる。高ランクが待遇がよいにもかかわらず手を抜いて低ランクに見せかける人もいる。

この世界に住んでいる人間を含む全ての生物に魔力がある。ごくまれに魔力が極端に少ない生物も存在する。

少ないとは言っても全くないということはない。魔力が少なくても訓練などで大きくすることができる。

『ランクの基準』

魔法学院初等部……E

魔法学院中等部……D

魔法学院高等部……C

魔法学院上等部……B

ランクの基準はあくまでも各課程終了時にこのランクにはなって欲しいというものなのだが、ほとんどの生徒は1ランク下だ。

魔法学院は高等部まで通うことが義務づけられている。だが、やむを得ない事情がある場合は特例として高等部に名前だけ入っている状態で登校しないということもある。

この世界には魔術協会と呼ばれる機関があり、簡単に言うと魔法を扱う者の管理をする。　魔術協会は魔法学院上等部を卒業した者しか入会出来ない。

よって魔術協会はエリート集団だという認識が世界中の人にある。

魔術協会は世界中にあり、その本部はクロリア王国にある。

さらに魔術協会とは別に魔術騎士団があり、それは学歴を問わず、優秀と認められれば入ることが出来るが、最低条件としてAランクだ。

クロリア王国の最大イベントとして4年に1度世界中の魔術師が集まり世界一の魔術師を決める大会がある。参加資格はAランク以上であること。

優勝者には世界最大の図書館……『世界書庫』に入ることが許される。

『世界書庫』には世界中のすべての書物がある。中には禁断の魔法とされる魔法の使い方が書かれている本も存在する。

『世界書庫』がどこにあるのか知るものはクロリア王国国王と魔術協会会長、大会優勝者のみである。

第1話（前書き）

ところどころ改変しています。

第1話

――クロリア王国魔法学院マジックゲート中等部――

1年2組の教室では、女性教師が教鞭をとっていた。どうやらこのクラスには真面目に授業を受けている生徒が大半をしめるようだ。

「私達魔術師にはランクがつけられています。ミスター・リカッド、ランクについて簡単に答えなさい」

呼ばれたレイル・リカッドは面倒臭そうに立ち上がる。

「はい。ランクとは魔術師の実力を示すためのものです。ランクが高いほど地位も高いです」

「まあ良いでしょう。座りなさい」

「はい」

レイルが座るのを確認すると教師は周りを見渡す。

「ランクはAからFがありAが最も高いランクです。ですが、例外も存在します。ミスター・クルー答えなさい」

「はい。Aよりも高いランクとしてSランクがあります。そして……」

カシア・クルーは1人の少年を見た後、再び前を向いて答える。

「Fランクにも満たないランク。落ちこぼれのGランクがあります」

「そうです、その通り！　初等部の者でさえEランクが多いのにシルフィード・マグナス、アナタは落ちこぼれなんですよ！」

シルフィードは名前を呼ばれたのにもかかわらず机に突っ伏している。

「マグナス君は寝てまーす」

「またですか！　中等部に入って2ヶ月、寝てばかりじゃないですか！」

騒ぐ教師の声に反応してシルフィードは顔を上げる。

「やっと起きましたか……だいたいアナタは」

「……うるさいババァ」

その瞬間、多くの生徒は教室の温度が下がった気がした。シルフィードは吐き捨てるように言って再び机に突っ伏した。

「な……ババァですって！　教師に向かってババァと……寝るんじゃない！」

教師はシルフィードの頭をつかみ、無理やり顔をあげさせた。シルフィードは仕方ないな、といったような顔をしている。

「シルフィード・マグナス、放課後職員室に来なさい。これは命令です。拒否権はありません」

「……わかりました」

「よろしい」　わかりましたと答えたが、シルフィードは職員室に行く気は全くない。

放課後になったらすぐに寮に戻るつもりだ。

――そして、放課後――

シルフィードはそそくさと学院を抜け出して、寮の自分の部屋に行こうとしていた。だが、教室の入り口に邪魔者がいる。

「……通せよ」

「ダメだよ。ちゃんと職員室に行かなきゃ」

教室の入り口に立つ女生徒アイリ・シグニットをシルフィードは睨みつけている。

アイリは優等生だ。真面目で成績も良く、中等部1年生にして既にCランクだ。教師達の中にはアイリのことを気に入っている者も多い。

「教師の犬が……。そこまでして教師に気にいられたいのか」

「そんなことはないよ」

「ならそこを退け」

「マグナス君が職員室にいかないと授業中はまた説教……マグナス君のせいで授業が進まないんだ」

「授業中邪魔にならないように寝ているだけだ。それなのに教師がくってかかる……それだけだ」

「それだから落ちこぼれなんて言われるんだ！　初等部の頃から授業中は寝てばかりじゃないか」

「いいから退けよ……ちなみに学院内での魔法使用は授業中以外禁止されている。純粋な力だけだと強いのは俺だ」

魔法学院は魔法を学ぶ所ではあるが使う所ではない。実習で魔法の練習をする以外は許可がない限り使ってはならない。

使った場合は生徒指導の対象となり、それ相応の処罰がされる。

「お、脅してるつもり？」

強がってはいるがアイリは痛いのは嫌いで、内心ビクビクしてい

る。
シルフィードは中等部1年生の中でも力は強い方で、素手同士なら上級生にも負けないだろう。
ちなみに、体育の成績はトップだ。
「脅してるわけではない。だが……早く退かないと本気で殴る」
シルフィードは手に力を入れて、拳を上に振り上げる。
「ヒッ……」
殴られる。そう思ったアイリは震えながらその場から退いた。シルフィードは所詮女か、とアイリを見下すような目で見る。
「それでいいんだ」
シルフィードは廊下に出て寮に向かおうとした。だが、シルフィードが廊下に出て歩きだそうとしたが足を動かすことができなかった。シルフィードが足下をみてみると、光でできている紐で足が縛られていた。
「……アイリ、校則違反だ。優等生のお前ならわかるよな、許可なしに魔法を使ってはならないことぐらい」
「それを言うなら……」
「俺は魔法学院に入ってから一度も校則違反はしてない」
「授業中寝ているし、教師の言うことも聴かないじゃない」
「授業中に寝てはいけないという校則はない。教師の話をきけという校則もない」
「で、でも……それは当たり前のことだから」「当たり前？　なら校則を守ることは当たり前じゃないのか」

「……うるさい。いいから職員室に行きなさい！」
「……今解放すれば見なかったことにしておく。幸いにも他の生徒は寮に帰ったみたいだしな」

シルフィードの言葉にアイリは迷った。きっとこのまま職員室に行かせれば魔法を使ったことをバラされるだろう。
校則違反の処罰は様々だが、どんな罰でもランクに影響するだろう。
酷ければ自分もGランクに落とされるかもしれない。

「……本当に、誰にも言わない？」

しばらく互いに黙っていたのだが、さきにアイリが口を開いた。
シルフィードは事を大きくする気はまったくないというか、早く部屋に帰りたい。
「もちろんだ。今すぐ……」
「何をやっているのですか！」
「……チッ。来るのが早いんだよババァ」

タイミングが悪い、とシルフィードは思う。もう少し遅ければ魔法は解かれていた。それに自分もこの場に居なかった。
アイリはというと青ざめた顔で教師を見ている。

「ミス・シグニット、これは一体どういうことです」
「も、もうしわけ……」
「すべて俺が悪いんです。職員室に行かず寮に帰ろうとした俺を止めただけです」
「……そうであろうとも校則違反を犯した者には処罰をしなければなりません。2人ともついてきなさい」

黙って教師の後をついて行く2人。アイリはたまにシルフィードを見ながら歩いているが、シルフィードはただ前を向いたまま歩いていた。

「ここで待っていなさい」

そういって教師は学院長室に入っていく。

「ど、どうしよう。学院長室だよ」

もちろん学院長はこの学院でもっとも偉い。さらにこの学院の学院長は中等部時代で既にSランクの魔術師として学生でありながら魔術協会の手伝いをしてきた。

そして、王国内だけではなく世界中でも有名で、『伝説の魔術師』の1人として今でも活躍中である。

「もとはといえばお前が魔法を使うからだろ。……ふざけるなよ」

「……ごめんなさい」

2人は互いに顔を合わせようとせず、アイリはうつむいて、ただ時間がだけが過ぎていく。アイリはチラチラとシルフィードを見ているが、目が合うとにらまれるのでビクビクしている。

「入りなさい」

学院長室から男性の声がした。シルフィードはアイリをチラッと見た後、学院長室の扉を開けた。

「シルフィード・マグナス、失礼します」

「あ、アイリ・シグニット、失礼します」

２人が中に入ると、２人をつれてきた教師と白髪混じりの男性……学院長がいた。

「話は聞いた。魔法を使ったようだね」

「もうしわけございません！」

アイリは深々と頭を下げるが、シルフィードはじっと学院長を睨んでいる。

「君は授業態度が悪く、教師の言うことも聴かない……何故かな」

「校則にはありませんし、学院で習うことがすべてだと思っていません」

「それでも学院の生徒として見せかけでも真面目にしていると助かるがね」

「……あいにく、俺は不器用ですから」

「まあ自分に正直なのは良いことだ。さて、今回の処罰のことなのだが……」

「退学でも良いですよ」

「高等部までは義務だから退学はないよ。酷くても留年どまり」

留年と聞いてアイリの顔が青ざめていく。留年するということはランクにもかなり響く。

「君達２人のどちらかが１ヶ月後にあるランク分け試験で２ランク上がれば処罰を取り消そう」

「……俺は退学が良いです」

「ち、ちょっと待ってください！　２ランクって無理ですよ」「君には無理だろうね。でもＧランクだったら簡単じゃないかい」

「必死になって頑張りなさい」

学院長室を出てシルフィードはアイリを置いてサッサと歩いている。

「ち、ちょっと待って！」
「……何？」
「ランク分け試験どうするの？」
「興味ない」
「き、興味ないって……留年になったらどうするの？」
「別にどうもしない」
「な、何で……」

アイリは呆然とした様子でシルフィードを見ている。

「……で、もう行って良いか？」
「ま、待って。お願い、今度のランク分け試験で2ランクだけで良いから」
「お前がAランクになればいいだけだろ」
「無理だよ！　今だって必死に勉強してCランクなのに」
「とにかく、俺はどうでもいいんだ」
「そ、そんな」
「それに、お前が原因だろ？」
「……ごめんなさい」
「ふん」
「あっ……」

シルフィードはアイリに背を向け歩き出した。

第2話（前書き）

駄文注意です。

第2話

ある日の昼休みのこと。シルフィードが食堂で昼食をとっていると、正面に誰かが座った。
シルフィードは食事の手をいったん止め顔を上げ正面の人物を見た瞬間顔をしかめ、再び食事をはじめた。

「……ね、ねえ」
「何度言われても俺の気持ちは変わらない」

魔法学院マジックゲート敷地内にある食堂。中等部用の2階、入り口から1番奥のテーブルにシルフィードとアイリとアイリの友達がいる。

「ねえ、アイリ……こんな奴に頼んでも無駄だよ」
「で、でも私は2ランクも上げられないし……」
「大丈夫。処罰が留年だとは限らないよ」
「そうかもしれないけど……」「なあ、そろそろ良いか？　食べ終わったから寮に帰りたいんだが」
「え！　午後からの授業はどうするの？」
「……アイリ、今日の授業は午前中だけだよ」
「え……そうだっけ」

今日は職員会議で午前中しか授業がない。職員会議は初等部から上等部までの教師が参加するためかなり時間がかかるらしい。

「さすが優等生……授業がなくても授業するんだな」
「うぅ……」

アイリは恥ずかしそうに顔を赤く染めている。
「マグナスは今から暇なの？」
アイリの友達セレーナ・クラントはシルフィードにたずねた。
「何でお前に言わないといけない？」
「暇なら……今から遊びに行かないかしら？」
「……何のために？」
「何のためって決まってるじゃない。親睦会よ」
「……くだらない」
「くだらないって何よ。私とマグナスはクラス違うからね。お互いのことまったくしらないから」
「何で知る必要があるんだ？　それに、仲良くなるわけない。よって、俺がランク分け試験で2ランク上がることはない」
「……もういい、2人で行くから」
「え、え？」
「行くよ、アイリ！」
「う、うん」
「……ふん」
アイリとセレーナは学院敷地外に遊びに行く。
この学院だけではなくほとんどの場合が大きな街の中に建っている。生徒は平日は校舎と寮を行き来するだけだが休日になると街に出て買い物をしたりする。
買い物をするには無論お金が必要だが、物などの代金もランクに

よって異なる。ランクが高いほど安く買える。Sランクになるとほとんどの店で無料になる。
お金についてだが学生はバイトで稼ぐ以外に王国から援助金をもらっている。毎月貰えるがやはりランクによって異なる。バイトの給料なども同じく異なる。

ちなみ学院内ではお金は必要ない。学費もないので誰でも入学出来る。

「ムカつく！　やっぱりアイツムカつく！」
「えっ……と、どうしたの？」
「どうしたもこうしたもないわよ！　アイツ、Gランクのくせに生意気」
「そんなこと言ったらダメだよ」
「何で？　処罰のことだって人事みたいに……ホントどうするの！」
「……どうしよう」

アイリはその場で止まりうつむく。その顔は今にも泣き出しそうだった。

「……アイリ、今日は街で遊んで嫌なことは忘れよう！」
「……セレーナ」
「私Eランクだけどアイリがいたら安く買えるし♪」
「……私利用されてる」

――クロリア王国首都クロリア――

「やっぱり街は良いね」
「そうかな？　私は静かなところがいいな」

アイリは小さな村で生まれ、初等部に入る時にこの街にやってきた。
はじめの頃は怖かったのだがいつの間にか慣れてしまい、今では休日になると友達とこうして街に遊びに来ている。

「……タシカニコノマチハサワガシイネ」
「え？」　アイリが振り向くと、緑髪の少年がいた。その目は真っ赤に輝いている。

「ハジメマシテ、ルー、トイイマス」

緑髪の少年ルーは丁寧なお辞儀をする。

「あ、初めまして。アイリ・シグニットです」
「私はセレーナ・クラントです」

2人もルーに自己紹介をした。

「あの……外人さんですか？」
「ン……ワタシ『リトリッジ王国』カラキタンダ」

リトリッジ王国は小さな島国だ。魔法学院もあるが小さい。だが、遺跡が多く、たくさんの学者達が訪れる。

「へえ、リトリッジ王国ですか」
「……リトリッジ王国は歴史的な建造物で有名な国だな」
「フレイル先輩！」

ディザ・フレイル。魔法学院マジックゲート中等部3年でBランク。顔立ちが整っていて優秀であり特に女子から人気がある。

「ヤア、ディザ」
「お2人は知り合いなんですか？」
「ああ、友達だよ……今日はこの街を案内するんだ。それじゃ、また」

ディザとルーは手を振りながら街の人ごみの中に消えていった。

「……わ、私、フレイル先輩と話しちゃった」
「そうだね。ビックリした」

同じ中等部とはいえ、なかなか会うことが出来ない憧れの先輩と話したことでセレーナは興奮していた。その後、2人はしばらく街をうろうろしていた。

「あ、そうだ。新しく出来たカフェに行かない？　そこのケーキが美味しいらしいんだ」
「へぇ、誰情報？」
「プルム情報だよ」
「なら本当だね」
「あれ？　何気に信頼されてない」

――クロリア王国図書館――

「……ヤハリソノセカイタイカイトヤラニユウショウシナケレバセカイショコニハイケナイノカイ？」「ああ、大会優勝者にしか『世界書庫』の場所も教えられないからな」

2人の少年はクロリア王国図書館で資料を探していた。禁断の魔

法に関する資料は普通の図書館に存在しないことは2人にはわかっていたがもしかしたら……という考えが捨てきれなかった。
結局何も見つからず、2人は図書館の隅で話していた。

「……イッソノコトコクオウヲオドシタラドウダ？」
「そんなことをしたら私達は犯罪者だ」
「オソカレハヤカレクニ……セカイヲテキニマワスンダカラベツニイイダロウ」
「ダメだ」
「ハァ……セカイタイカイガアルノハライネンダロ。ソレマデマツノカ？」
「……実験をしようと思う」
「ナンノジッケンダ？」　ディザは質問には答えず、図書館の出口へと向かう。図書館を出てしばらく歩いた。ふと立ち止まったディザは振り向いてルーを見る。

「……まずは仲間を探さないとな」
「ワタシタチダケデハダメナノカ？」
「駒があれば戦略も広がるからな」
「ダガ、ソレナリニユウシュウナモノヲサガサナイトイケナイ」
「大丈夫だ、あてはある」

――魔法学院マジックゲート――

夕食の時間となりほとんどの生徒が食堂で食事をとっている。

「……で、頼みって何ですか？　フレイル先輩」

ディザは1人の女子と相席していた。その女子の顔は若干赤い。

「つきあって欲しいんだ」
「……え？」
「君じゃないといけないんだ。……頼む」
「わ、私なんかで良ければ……喜んで」
「ありがとう。それじゃ、後で僕の部屋に来て欲しい」
「わ、わかりました」

ディザは立ち上がり、食堂をあとにした。外は既に薄暗くなり日は沈んでいた。

「オドロイタナ……コクハクカ？　ココロニモナイコトヲペラペラト」
「いや、あの言葉は本気だよ。実験の適応者は少ないから……」

この日、1人の女生徒が学院から姿を消した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1438ba/

魔法学院物語(仮)

2012年1月4日00時50分発行